

『灘の酒』ブランドの再構築と産地の構造変化

相川 雄哉^{*+}

要旨

兵庫県・灘は戦前期最大の清酒産地であったが、清酒を取り巻く環境が戦前から変化した現在でもなお、生産量第一位の清酒産地である。本稿は戦後から現在にかけての灘における長期的な産地発展のメカニズムについて、農業（つまり酒米の生産）と工業（つまり清酒の生産）の両側面から分析した。分析からは戦後の灘には大きく次の四つの成長局面があったことが明らかにされた。（１）灘は地理的有利性を活かして、戦後初期には伝統的な技術を用いて順調な発展を遂げるが、（２）高度成長期になって清酒への需要が高まるとともに、清酒の質よりも生産の効率化を追求し、大量生産を目指すようになり、（３）やがて清酒の高級化とともに生産の量的縮小を余儀なくされたが、（４）再び質の高い原料米を使った高級酒の生産に移行し、生産額の回復を目指すという戦略に転換した。また産地発展の背景には、産地を構成する酒造家や農家、地方自治体による集団行動(**collective action**)が大きな役割を果たしていたことが明らかになった。この結果は、産地の発展にはそれらを支える技術や制度、組織が重要である、という過去の研究蓄積と符合するものである

* 神戸大学大学院経済学研究科 博士後期課程

+ E-mail: yuya.aikawa0422@gmail.com